

## 独我論は論駁されたのか -意味の实在論と反实在論との対立の帰趨-

重田 謙 (Ken SHIGETA)

長岡技術科学大学

---

S. A. クリプキ (Kripke, 1982) は『哲学探究』 *Philosophische Untersuchungen* の規則論に「何らかの記号で何かを意味するという事に関するいかなる事実も存在しえない」というラディカルな意味論的懐疑を読み込んだ。そして、その議論は『探究』解釈としてだけでなく、独立の哲学的議論としても数多くの批判を受けてきた。それらの批判には、そうした意味論的懐疑を定式化することがそもそも不可能であるというもの、あるいはその懐疑を正面から解決することが可能である、というものがある。(特に後者は「記号で何かを意味するという事に関するなんらかの事実が存在する」と考えているのでこの立場を「意味の实在論」と呼ぶことにする)。そして、ごく一部の例外 (M. Kush, 黒崎宏、等) を除いて、クリプキの議論を直接論じている現代のほとんどすべての有力な研究者 (G. P. Baker & P. M. S. Hacker, J. McDowell, S. Soames, W. Goldfarb, P. Boghossian, C. Wright, P. Horwich, P. Pettit, T. Thornton, M. Williams, 鬼界彰夫, 飯田隆, 野矢茂樹、等) はこの立場に属している。

一方で、「その話し手だけが知ることができる、直接的で私的な感覚を指示する」言語は不可能だといういわゆる私的言語批判に基づく独我論の論駁に異論を唱える論者は皆無であると言える (限定的な解釈のもとでの永井均を例外として)。

本発表の目的は、現在の圧倒的な趨勢であるこの二つの立場、意味の实在論と独我論の論駁、が両立不可能であることを示すことである。より精確には、意味論的懐疑と私的言語と独我論をめぐる主張に次の関係が成立することを示すことである。

意味に関する事実の存在 (意味の实在論) → 私的言語は可能である → 独我論の妥当性逆に言えば、次のような関係になる。

独我論の論駁 → 私的言語の批判 → 意味に関する事実の非在 (意味の反实在論)  
つまり、私が本発表でしめたいのは、意味の实在論を支持するか否定するかという問題と独我論を肯定するか否定するかという問題は論理的に独立ではないということである (私見では、永井もまたこの二つの独立性を認めている)。クリプキの議論では懐疑論的パラドックスと懐疑論的解決によってこの二つの論理的連関が支持されている。しかし、その点で彼の議論には致命的な欠陥を孕むことは数多くの論者に指摘されている。本発表ではクリプキとは全く異質の議論によってこの論理的連関に根拠づけを与えることを試みる。